岩手日報
夕刊
株式会社 新岩手社
盛岡市内丸61
電話代表②3131番
© 新岩手社 1961

七四二世帯を焼失
田老鉱山住宅は全滅

二十九日午後から宮古市、下閉伊郡、久慈市の県北沿岸に続発した山林火災は台風の余波の低気圧による平均風速十㍍、最大瞬間風速三十㍍内外の強風にあおられて猛火と化し、山間部から海岸の部落をつぎつぎ焼き、三十日午前一時すぎから風が弱まるとともにようやく下火となったが、下閉伊郡田老町ラサ工業田老鉱業所を全滅させたのをはじめ、七百四十二世帯と小中校四校を焼失、死者一人、負傷者三十三人を出した。（三十日午後二時現在県警本部調べ）三十日明け方から出動した自衛隊員と消防団の活躍でこんど民家への延焼のおそれはなくなった。県は災害救助隊本部を設けて被災者の救援に乗り出し、毛布、寝具、日用品を手配するとともに応急仮設住宅の建造などの対策を急いでいる。損害はラサ工業関係の十三億、民家四億をふくめ三十億を越える見込み。山火事と強風による被害状況つぎのとおり。

自衛隊、車両含め五百人出動
宮古に指揮所

自衛隊一本木駐とん部隊の発表によると、災害地へ派遣された自衛隊員は月野木一佐指揮の三個大隊四百八十五人と車両八十七台である。県災害対策本部の要請で二十九日午後五時四十分偵察班を先行させたのち、第一大隊中村二佐以下百六十一人と車両十四台、第三大隊米谷一佐以下百二十七人と車両十八台を宮古地区に、ついで第二大隊新井二佐以下百七十四人と車両二十九台を岩泉地区に派遣、宮古市役所に連隊指揮所を設け、月野木連隊長指揮で消火と災害復旧に当たっている。

なお八戸の第九混成団から竹下団長が三十日午前九時ヘリコプターで来盛、藤沢特科第九連隊長とともに対策本部で協議中。

猛火の被害甚大
県北沿岸の惨状

強風にあおられ燃え広がる宮古岩船地内の山林　＝松橋宮古支局長撮影

田野畑村に災害救助法

県災害救助隊本部は、三十日午後一時五分、田野畑村に災害救助法を適用した。被害は全焼八戸、半焼五三戸。

死者一、負傷三三

県警本部が調べた三十日午後二時現在の宮古市、下閉伊郡下、久慈市の山火事による被災戸数、死傷者、山林焼失面積は次のとおり。

【宮古市】▽女遊戸三六▽箱石三〇▽芋野一▽計六七。

【田老町】▽田老鉱山四〇〇▽青ノ滝一一▽摂待二〇▽樫内一五▽小堀内一一▽三本木一▽野田五▽計四六三

【岩泉町】▽乙茂六▽田茂宿一二▽本郷七▽中里四七▽袰野八▽計八〇

【普代村】▽黒崎（小学校）一▽太田名部四五▽野場一▽黒崎五五▽計一〇二

【田野畑村】▽子木地三〇計三〇

◇死傷者　三十四人

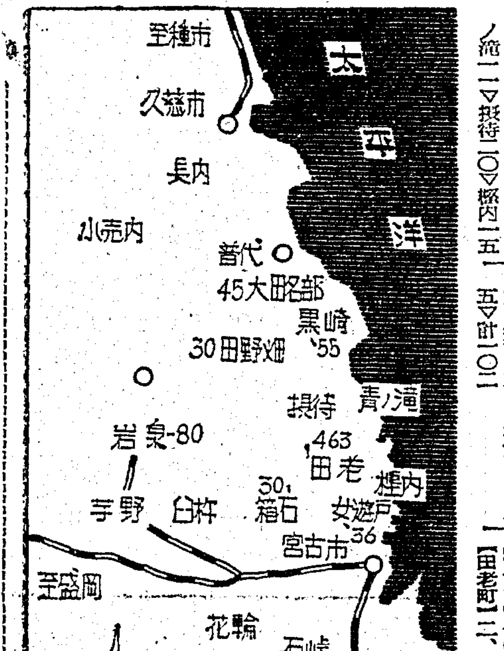
【死者】▽宮古市崎浜一

【負傷者】▽田老町田老鉱山三一、▽岩泉町袰野一

◇山林焼失　一二、〇〇〇㌶

【宮古市】一〇、〇〇〇㌶

【田老町】二、〇〇〇㌶



市町村別の林野焼失面積

県災害対策本部三十日正午現在の林野焼失面積は五、三〇〇㌶で、市町村別では次のとおり。（単位ヘクタール）

宮古一五〇〇、田老一〇〇〇、新里一〇〇、岩泉一五〇〇、普代三〇〇、田野畑五〇〇、久慈三〇〇、計五三〇〇。

戦後の大火は七件目

県消防課の調べによると本県での戦後の大火は六件ある。

▽二十一年十二月二十八日上閉伊郡大槌町大槌地内民家のコタツから出火、八十四世帯六、三三〇平方㍍を焼いた。損害六百七十八万円。

▽二十二年十二月二十九日下閉伊郡山田町山田の民家のコタツから出火、六百七十五世帯三一、九四九平方㍍を全焼、損害約三億円。

▽二十四年六月九日水沢市羽田の鋳物工場の煙突からの飛び火で百四十八世帯二八、七七六平方㍍を全焼、損害五億九千万円。

▽二十六年五月二十三日岩手郡雫石町で取り灰の不始末から百二十五世帯一八、四三〇平方㍍を焼き負傷者五人を出した。損害二億円。

▽三十一年四月十七日下閉伊郡田野畑村猿橋地内の民有林の炭焼きガマから出火、一五㍍の西風にあおられ六時間燃えつづけ、一四三五㌶を焼き、損害八千六十七万円。

▽三十一年四月二十四日田野畑村植木沢地内の炭焼きガマの飛び火から官公造林、村有林など七七四㌶を焼き、損害四億九千三百十四万円。

たえどき

毛藤勤治

はた目では、毎年同じような仕事をくり返し、変哲のないように見える農業も、近ごろはその内部に大きな変化を示しながら、大またで進みつつある。町に住む多くの人びとが知っているとおり、数年前には濁りなくすんだ朝の町中を、あたりかまわずにいなか香水をプンプンとまき散らしながら、ゆうゆうとまかり通ったあのこやしくみの牛馬車など、いまはまず見られなくなった。こやしくみは完全に農家の人びとの手から離れ、いっさいが衛生車にゆだねられてしまったかっこう。ためにいまでは、あのかがみモチ回し（旧の小正月、一ヵ年分のお礼に、一升モチを丸かがみのように平たく伸ばし、新ワラで包んで、町場の人びとにくばる昔からのならわし）も過去のものとなってしまった。またいなか香水などということばも、いまの若い人びとには不用のものとなりつつある。

こやしのことがでたのでついでといえば変だが、現在は過去の人ぷん尿に代わって化学肥料万能の時代といってよく、この化学肥料の銘柄はゆうに一万二千種類を越しており、工業の発達と商魂のたくましさを物語っている。岩手県では、そのうち少なくとも百二十種類のものが使われているが、リン酸質肥料を例にとって見ても、溶成、焼成、重焼成、苦土過成などあって、それぞれ用途が違い、これを知るだけでも大変。

また、病虫害防除に使う薬にいたっては、DDT、BHCはあっても、TEPP、EPN、テデオン、ケルセン、サッピラン、マイトラン、モンセット、パムロン、フミロン、メラン、ペル、ルベロン、ドドンパ……まさかドドンパは薬ではないが、こうあげてくると、しろうとの人びとには、ある星の国々の名前だといわれても、ああそうかなんてうっかりうなずくかもしれない。

除草剤はなおさらで、TVA、ICO、IBC、WMCAなどとWCまがいの名称がざらで、なにがなんだかわからなくなってくる。案外近いうちに、農家の娘さんたちの田の草取りの姿が、たんぼから消え去るときがくるかもしれない。とまれ、こうなると、ちょっとやそっとの知識では、まともな農業ができなくなりそうだ。

また、田植え時（たえどきと百姓がいう）だって、つい十一年前は、六月十日ごろが最盛だったが、いまでは六月十日はたえどきの終期にあたる。なわしろに油紙をかぶせて苗伸びを早める革新的な技術が、こんなにたえどきを変化させ、たえどき前をあてこんで、昔からきまっていた祭日も、これを祭司する人びとに悩みの種を投じているようだ。早まったたえどきに応ずるため田起こしも影響をうけ、はかのいかない牛馬に代わって一万台を越す発動機付きの田起こし機械が普及している。

大変な変化である。偉大な進歩だと思う。とかく岩手の農業は後進的だといわれたが……。だが、ここでただ一つ、昔ながらに残されているもの、その代表はなんといっても田植え。田植え機械の実用化は、ずいぶんと期待されながらも、まだいつかな現われそうもない。だが、むしろ種モミをじかにたんぼにまく方法が田植え機械より早いだろうという専門家もいる。このような田植えのいらない稲作は、みずほの国の農業の大福音であることに間違いはない。

さて、田植えが「たえどきに病人はない」という。たえどきがくると農家の人びとの表情も急に明るくなり、活気が増してくる。少しぐらいの病気は病気でなくなるらしい。「たえどきにノホホンとねておれるか」と一途に思う心はわかるが、こうした人びとには田植え時でなくて「耐え時」であるに違いない。だから、たえどきの無理かあとにたたるようなことでもあれば、ご当人はもちろん、その一家にとっても気の毒でならない。

田植えは昔からの姿で続けられる限り、まわりの人びとがいたわりの心をもって気づかってやり、ことしもひとりもかけることなく、おそろいで、さなぶり（泥おとし）を祝い、秋の豊かな実りを祈るようにと願うのは私ひとりだけではないと思う。

（県農務課農産班長）

電力
大槌以北はほとんど送配電停止

東北電力岩手支店の調べによると、沿岸方面の強風、火事による送配電施設の損害が予想以上にひどく、大槌町以北は都市部を除きほとんど送配電が停止され暗黒にとざされている。岩手支店調べによる三十日午前十時現在の被害は次のとおり。

◇送電停止　▽宮古―大槌線（断線）▽栗林線（樹木倒壊）▽岩泉線（山火事のため焼失）▽宮古―釜石線（電柱焼失）▽小本川線（山火事のため焼失）▽鈴久名―釜石線（一時停止、三十日午前八時半復旧）

◇配電停止　宮古営業所管内で電柱約三百五十本が倒壊、焼失、約五百本が断線で宮古、岩泉、久慈市内を除き安家、平井賀、普代、種市、田代など郡部と釜石市栗林付近が全面的に配電がストップ、また山田、中里、大槌変電所が送電を停止、大槌が三十日午前中に復旧するほか回復の見込みはたっていない。

◇送電　栗橋、橋野、日頃市発電所は送電施設系統の災害のため発電を中止している。

電話線
連絡つかず
33回線が切断

岩手電気通信部は保全課が中心となって被害調査収集と復旧の手配に多忙をきわめているが、被害激じん地の連絡がつかず調査は進んでいない。三十日朝までにわかったのは盛岡から岩泉三、松尾三、横手一、平館二、大更二、滝沢二、久慈一回線、宮古から門馬一、岩泉四、小本一、田老四回線、岩泉から普代一、安家一、平井賀一、小川一回線。警察電話は盛岡―岩泉一、宮古―岩泉一回線、合計三十三回線が切断、焼失で不通となり、普代、安家、平井賀、小川方面は全然連絡がつかない。

このほか部落の電話焼失が相当ある模様で、岩手電気通信部は三十日宮古に移動無線車を急派するとともに、盛岡、釜石から二十人の作業班を派遣した。宮古―岩泉間のケーブルが十ヵ所以上も寸断されているので復旧のメドはいまのところたっていない。

鉄道
各線とも復旧

盛鉄局管内の被害は▽八戸線が三十日未明八戸市内の火災で避難した一般民が家財道具を線路に置き、延焼したため陸奥湊―鮫駅間尻内起点一〇㌔から一〇・七㌔区間のまくら木二五〇本が焼け、レール五〇㍍が熱のため曲がり、同区間は不通、下りは尻内―陸奥湊間、上りは久慈―鮫駅間で折り返し運転し、同日正午ごろ復旧した。

▽山田線は豊間根―岩手船越、箱石―陸中川井、平津戸―川口の三区間で通信線が切れ、三十日午前五時二十分宮古駅発上り五一二旅客列車が盛岡駅に二十分延着したが、回復し同日午前中に正常ダイヤに戻った。

▽東北本線は青函連絡船の欠航などで二十九日午後五時から同十一時ごろまで上下列車とも三十分前後おくれたが、三十日午前九時現在十分内外のおくれに回復した。

▽施設関係では三十日午前九時現在、通信線の支障続出からまだ詳しいことはわかっていないが、全壊したとみられていた山田線陸中山田駅は本屋の屋根一一二平方㍍が吹き飛ばされただけとわかった。

その他、山田線に宮古、茂市、千徳、豊間根、宇津野の各駅、花輪線は扇田、竜ヶ森、陸中花輪の各駅が本屋、倉庫の屋根の一部が吹き飛ばされた。

県議会から調査団

県議会は二十九日から三十日にかけ被災した地帯を調査するため、米谷副議長を団長とする県議調査団を派遣することになり、三十日正午自動車で盛岡をたち宮古、田老、岩泉などの現地を調査する。

寝具など給付
県の救援対策

県災害対策本部は三十日被災地への対策を協議、各市町村の被害が確認され次第災害救助法を適用した宮古市、田老町、岩泉町、普代村に対し直ちに次のような応急対策をとることにした。❶医療、助産を要する人については現地に向かった日赤救護班が救護に当たる❷被服、寝具その他の日用生活用品については救助法による夏季の基準額の範囲内で全焼五人世帯八千七十円以内、半焼はその二分ノ一以内を支給する❸学用品は全焼世帯の学童に小学生一人につき百五十円以内、中学生一人につき二百八十円以内を支給する。❹生業資金は全焼世帯の二割五分以内に貸しつける❺応急仮設住宅は全焼戸数の三割以内とし、一戸当たり一六・五平方㍍で三・三平方㍍当たり二万円以内の住宅を建て収容する。

フェーン現象から
大火の原因　〝乾燥した強風〟吹く

約八百戸の民家をひとなめするほどの山火事の猛威がなぜ起こったか。空気が乾燥していたのと異常な突風が吹きまくっていたのが原因。盛岡地方気象台は数日来湿度が低く、非常に乾燥していたところへ、台風四号くずれの低気圧が日本海に発達し、風が強くなった。この低気圧にともなって雨があればよかったが、雨がふらず、低気圧がオホーツク海にはいり、風が西に変わった。このため、三陸沿岸は山の風下になり下降気流の強さに見舞われた。このような気流が出ると温度があがるのでますます乾燥する。こういう状態をフェーン風というが、このフェーン現象がおこったためあのような大火になったと説明している。

梅田台長の話　フェーン風の現象が日本海側ではよくあるが太平洋沿岸におこったのは珍しい。

フェーン現象とは

風が山を越えて〝吹きおりる〟さいに気温が上がり湿度が下がる現象をいう。春先に日本海に低気圧がはいり、これに向かって太平洋側から南風が吹き込む。この風が日本海沿岸に〝吹きおりる〟とき裏日本はバカ陽気で空気はカラカラにかわく。〝春のアラシ〟と呼ばれるこの現象は、日本のフェーン現象の代表的タイプといわれる。しかし風が強ければ山の近くで局地的なフェーン現象が起こる可能性は理論的にはどこにでもあるわけだ。二十九日夜の青森、岩手、宮城地方の火災の場合は、北海道に上陸した強力な低気圧と北上山脈のデコボコ地形――この二つが〝乾燥した強風〟という気象条件をつくり出した結果とみられる。

最大風速23・5メートルを記録

盛岡地方気象台が二十九日午後十時まとめた調べによると、二十九日午前から県下一帯に吹きだした南の風は正午近くから南西にかわり、午後一時ごろ平均風速一三・五㍍、盛岡地方の瞬間最大風速は二二・一㍍を越えた。その後平均風速は一〇㍍台に落ちたが午後七時には最大二三・五㍍を記録した。

二十九日の最高温度は午前十一時盛岡地方で二二度に対し宮古地方では二九・六度、湿度が低くかなり乾燥、大火の起こりやすいフェーン現象を示していた。

◇お断わり　山火事、強風被害の記事速報のため一部地区記事重複します。

大三小言

こんどは山から〝赤い津波〟の不意討ち。災害絶えぬ宿命の沿岸、一夜に七百戸ひとなめ。

○

フェーン現象伴ったうらみの4号台風のいたずら。事前警告にぬかりはなかったか。

○

火災には無防備だった山林王国。不可抗力とあきらめず緑化と両輪対策講ろう。

○

工都八戸でも一千戸焼く。ケタ違いの大火事、木造建築の悲劇は日本の縮図。

○

被災者に〝倍増の愛の手〟をさしのべよう。県民の熱誠に期待する。

八戸市で一千世帯
五千人が被災
五時間燃え鎮火

二十九日夜十一時四十分ごろ、八戸市白銀大沢片平の清水水産加工場付近から出火、おりから強風注意報下二十㍍の強風にあおられ、火は海岸の県道沿いに二手に分かれて鮫港方面へ燃え広がった。地元消防車をはじめ、隣接町村消防団の消防車四十五台が必死の消火につとめたが、ただ一つの交通路である県道が火に包まれたため、消防車が活躍できず、五時間余も燃えつづけ、約七百むねを焼き、三十日午前五時すぎようやく鎮火した。青森県の調べによると、この火災で一千世帯約五千人が焼け出され、損害は二十五億円に達するという。

出火場所は商店街と住宅が一本の県道沿いに密集した地区だったので、火の回りは早く、またたくうちに八戸営林署[illegible]寺、八戸署白銀派出所、白銀消防とん所、岩淵病院、国鉄白銀駅ホーム待合所などをなめつくし、火は米軍用、漁船用のガソリン・タンクがある鮫港岸壁に迫り、一時は危険となった。このため、陸上、海上自衛隊八戸駐とん部隊約四百五十人が付近の家屋を破壊し、ガソリン・タンクの延焼をかろうじて防止した。罹災した家族や避難者は白銀小、中学校、八戸水産高校に収容され炊き出しをうけている。火災が寝入りばなにもかかわらず、いまのところ幸い死傷者はないもよう。

焼失町名　八戸市の焼失町名は次のとおり。（カッコ内は世帯数）

▽白銀町大沢片平（五〇）▽同第一三島（七〇）▽同第二三島（九〇）▽同第三三島（一四〇）▽同三島（二〇〇）▽同三島上（五〇）▽清水川（七〇）▽同下道（二四〇）▽同第一新町（一三〇）▽同第二新町（二一〇）▽同砂森（一〇）▽同第一人形沢（二〇）▽同第二人形沢（七〇）▽同第一本町（三〇）▽同第二本町（二〇）▽同第三本町（八〇）▽鮫町と小学校通りの一部。

八戸市とは

八戸市は青森県の東南部にあり、人口約十七万三千。東北有数の臨海工業都市で昭和四年五月一日市制施行、また八戸港は三陸沿岸の代表的な商、漁港で、別名〝鮫港〟ともいわれ遠洋、近海漁業の根拠地として知られ、年間水揚げ額は四十三億円に達し、全国第三位を誇っている。なお同市は三十五年五月のチリ地震津波で約四十億円にのぼる大被害をうけ、県の災害救助法が適用され復興途中だった。出火した白銀町は同市の海岸部で商店と住宅がごたごたと並んだ一角、市役所などの官庁街は高台にある。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。